

# 海彼世界への魂の旅

## —オーストロネシア（南島）語族における死者の島の諸相—

後藤 明

### はじめに

台湾・東南アジア島嶼部からオセアニアにかけて広がるオーストロネシア（南島）語世界には、死後、魂が船ないしカヌーで移動して行く海彼の源境あるいは魂の赴く島の観念が広く見られる（図1）。類似の観念は、インドネシアからオセアニアに見られるので（後藤 2003）、おそらく仏教、ヒンズー教あるいはイスラム教のような外来宗教以前から存在したものと思われる。さらにこのような観念は、琉球列島のニライカナイや古代日本の常世と共通性が高く、補陀落渡海の信仰とも共通の基盤をもつ可能性があろう。

### 1. 魂船の表象——インドネシアやメラネシア

インドネシアからニューギニアの海岸部、そしてメラネシアの西部にかけては魂の船の表象が発達する。有名なのはボルネオ島ダヤク族における魂の船の表象である（図2）。この船には生命の木、そして神話的動物であるサイチョウや水蛇が描かれる。またスマトラのバタク族、スラウェシのトラジャ族、そしてルソン島のイフガオやボントック族のような内陸の民も、家ないし棺がカヌー型であることは有名である（図3）。さらに死者の船の意匠はバテック布にも織り込まれる。この魂の船は、マレーの病船（厄送り船）の影響があるとも言われている（図4）。厄送り船はカヌーに悪霊とくに病気をもたらす悪霊を封じ込めて、下流や海に流す風習である（Moss 1925: 29）。

死者の船はニューギニアを通過して、西部メラネシアのビスマルク諸島にまで見られる。とくにニューアイルランド島で発達した木の彫刻様式「マランガン」には、死者の船のモチーフが特徴的である。マランガンは祖先儀礼に関連する木彫芸術である。ニューアイルランド島から採集された博物館資料は、漁に出て戻ってこなかった漁師、おそらく鮫に食い殺されたのだと思われるが、その漁師の思い出に作られた、と言うのである。ダヤク族やバタク族が信じていたように、ここでもかつて戦場で殺された戦士は同じような船に乗って西方にある死者の島に運ばれたと考えてよい（Spiegel 1971: 37）。

この死者の船の表象は青銅器文化であるドンソン文化とともにインドネシアからメラネシアに広がったと考えられる。ベトナム起源のドンソン文化は、時期的には紀元前5世紀から紀元後1世紀頃であり、オセアニアへの最初的人类進出（メラネシアは紀元前1300年以降のラピタ文化に伴って）の後から来た文化の波、いわば第二波以降にきた波である。しかしそれより早くオセアニアに進出していた人々の間にはもっと原初的な海彼の世界や魂の旅の観念が存在していたようである。

### 2. メラネシアとミクロネシアにおける死後の島

#### 2.1. メラネシアの死者の島

メラネシアでは死者の魂の赴く先としてしばしば具体的にある島が示される。たとえば筆者の調査地、中部ソロモン諸島のマライタ島、ランガランガでは、死者は近隣の小島に埋葬されるが、一部の位の高い者（例 司祭）の頭蓋骨はその後、村の祭壇に戻される。しかし他の者はそこにしばらく安置された後、塚に葬られる。祭壇に頭蓋骨が奉納された者も、何らかの理由で村を移動したりすると

きは埋葬の島に戻される(図5)。その後死者の魂はさらに遠くの死者の島に旅立つとされる。ガダルカナル島のマラウ湾にあるこの小島では、死者たちが生前と同じように生活をしていると言われる。ガダルカナルはランガランガ・ラゲーンからは西方にある(後藤 1996: 258-273)。この死者の島に一時死体を安置する風習と関連して面白いのは、死体化生型のココヤシ起源神話があることである。さらにココヤシ=頭蓋骨のシンボリズムも背景にある。

一部の死者の島は島と言うより、単なる海上のマングローブの茂みである。マングローブの木の上に埋葬された死者はやがて骨が海に落ち水没する。これはインドネシアからオセアニアの各地に見られる水葬とも関連するであろう。

ソロモン諸島のサンクリストバル島では、死者の骨は鯨型の器に入れられ、カヌー用の棚で密閉されて海に流される。人々は流れてゆくのを見守り、最初に近づいてきた物が祖先の魂の化身であると考え。たいていは鯨だが、蛸、イカ、亀あるいは鰐のこともある。鯨は一般に祖先の化身として畏敬されるので、鯨に化身した魂は救済されるが、変な動物に取り付かれて化身した魂は浮かばれず、悪霊として振る舞うと信じられている(Fox 1924: 108)。

## 2.2. ミクロネシアの死者と豊穡の島

ミクロネシアの中央カロリン諸島には、南の島の観念がある。作物、とくにパンの実はこちらから来たと言われる。さらに一部の事例では、この島は軽石に由来し、漂っていると言われる。魂は南進して、明るい髪の祖先の国にたどり着く(Böhne 1937:87)。

ギルバート諸島では、魂は北に行き、島から島へと飛び跳ねてゆく。魂は審判を受けねばならず、もしうまく行くと幸福な使者の国ボウルに到着する。そこで魂は食料を与えられ祖先によって長寿が祝福される(Mackenzie 1930: 169-171)。

マーシャル諸島民が信じるには、魂はラロクと呼ばれる守り神のいる珊瑚礁を越え、恐ろしい悪魔の地に至る。もし悪魔に捕らえられなかったら魂はさらに西に行つてエオレロックという天国の島に帆かけカヌーで到達する。大事なことは魂が大きなカヌーで現れるか、それとも小さなカヌーで現れるかだ。もし大きなカヌーで現れれば、魂の存続が約束される。もし小さなカヌーであれば最後の審判が下される(Frazer 1994, III: 87)。

魂のカヌーはパラウ諸島でも見うけられる。それは魂をピリル島の南東にある見えない島に運ぶ。またボナベ島の来世は島の西側かあるいは海底にあるとされる(Mackenzie 1930: 171)。ヤップでは魂は天国に登るが、天国自体が海に囲まれた島のようにイメージされていた。そこでは住民はカヌーに乗って魚を捕まえている。あらゆる作物が実り、それらはあとで地上に植えられた(Frazer 1994, III: 167)。

## 3. ポリネシアにおける海上他界

### 3.1. 魂の船

魂船の概念はポリネシアの東部、マルケサス諸島にまで到達していた。そこでは死後の魂は、天上ないし地下界に行くと言われた。その場所は後述のようにハワイキと一般的に呼ばれている。興味深いことに地下界への通行手段は海であった。魂はカヌーのような形をした棺によって流されると考えられた。ときには死者の島はティプロネスという名前の幸福な島として捉えられた。この島はヌクヒヴァ島の西方海上にあるとされた。島民がこの幸福の島を大型のダブルカヌーで見つけに出かけ、戻ってこなかったという話は珍しくない。ある時はウアブ島の40人の男が首長に反抗し、破れたため、夜陰

に乗じて密かにこの幸福の島を探しに船出した。天上界に向かう魂さえも、祝福の地にたどり着くためにカヌーが必要であった。島民は後生は天にある島のような世界だと信じていた。

一人の西欧人が谷間にある墓を訪れたときのことだ。そこには偶像があり、数歩離れたところには四隻の立派なカヌーが置かれていた。そのカヌーはアウトリガーが備えられ、人間の髪の毛、珊瑚、そしてたくさんの長くて白い吹き流しによって飾られていた。艦には櫂を持ち、装飾で飾った人間の偶像が舵を取っていた。もっとも立派なカヌーの艦に座っている舵取りは、敵に殺された司祭であると人々は語った。またカヌーの中や周りにはたくさんの死体があった。首長、司祭あるいは戦士のような傑出した人々は、天にカヌーでたどり着くための漕ぎ手にするためにたくさんの人身御供が必要であった (Frazer 1994 III: 364-366)。

### 3.2. 豊饒の島

豊饒の島の観念はポリネシアにも見られる。すなわち作物や貴重な財貨がそこから来たと語られる島が存在するからである。

トンガでは神ヒクレオ (Hikuleo) が支配すると言われる死者の国プロトゥ (Pulotu) への船旅の話がある。四人の神がプロトゥへ行こうとする。途中の岸で老いた女神と一緒に乗せてくれと頼む。しかしすでに船は満杯だったので断ったが、女神はどうしても乗せてくれ、自分が行くといいこともあると譲らず、とうとう彼女も乗せてゆくことにした。彼らはそこでいろいろな試練を受けるが、女神の助けで生き延び、戻るときにヒクレオの秘匿するヤマイモ、タロイモあるいはある種の魚を盗んで来た (Gifford 1924: 155-164)。

マルケサスには、東から西へ向かう旅の話がある。首長が死んだとき盛大な葬式を催した。たくさんの花が供えられたが、太陽が昇るとしぼんでしまう。そこでクラという鳥の赤い羽で飾りを造ろうとして、英雄が遠く東へ旅だった。彼は二人の義理の息子を連れ、大きなダブルカヌーで140人の漕ぎ手を乗せて出発した。しかし目的地は遠く飢えて80人も死んでしまった。しかしようやくたどり着き、鳥を捕まえるために罟を作って羽毛を得た。行きは七ヶ月、帰りは一年がかりで戻った (Von Steinen 1988:11-12)。

### 3.3. 死者の旅立ち

ハワイを始めとする島々に共通に見られるのは魂のジャンプ地点である。島の西や北、あるいは南にある海に突き出た岬がしばしば魂の旅立つ場所とされる (図6)。しかしクック諸島のマンガイアの事例はもっと複雑である。ここでは死者の魂はまず島の東のある地点に集まって太陽を待つとされる。そして年に二度、夏至か冬至の日に海岸で太陽を迎え、太陽の運航にそって島を横断し、最後に沈む太陽とともに死者の国アヴァイキに向かうとする (Gill 1876: 152-165)。

ひとつ指摘しておきたいのは、数ある作物の中でパンの実がしばしば海彼の源境からもたらされたとされる点である。オセアニアにはココヤシの起源を中心に死んだ神や鰻から作物が起源したという話が多い。それに対しパンの実の海の方からもたらされたと語られるのが特筆されよう。またポリネシアに見られる魂のジャンプ地点で、しばしば魂はパンの木から最後のジャンプをすると語られるのも興味深い。さらにソロモン諸島の民話で死者が世界から来た娘と結婚する話がある。男は娘に同行し、母親に求婚したいと告げる。そのときパンの実を食べないという約束で結婚を許される。しかし男は空腹の時に食べてしまった。パンの実は地上でもっとも甘美な食べ物なので、一度死者の国を尋ねた者にとっては、許されない行為であった。つまりパンの実はこの世とあの世、死と生を区別す

る象徴的な食物であるように思われる。

#### 4. ハワイキ：ポリネシア人の始祖の国

##### 4.1. ハワイの神の国

ハワイでは、海彼の源境（カヒキ）のことが移住伝承の原因を語るチャントなどでしばしば言及されている。それは失われた島、あるいは神によって隠された土地で、夜明けや日暮れの時に、遠くの水平線に見えると言われた。神の力で海底に沈んだり、浮いたり、浮遊したりする。「カーネとカナロア神の秘密の土地」がそのひとつだ。一説ではそれは天と地の間の土地で、生霊が労働も死も恐れず喜びを味わえる土地だった。民間伝承では、決まった日にこの島が通り過ぎるので、特別な雲がわく。あるいはこの土地が近づくと遠くに見えることもあり、鶏や豚が鳴き、光やサトウキビが独特の動きをする（Beckwith 1940: 69）。

この島には若返りの水があったと言われる。カウアイ島のワアルアでは首長がこの島に乗って永遠に消えたと語られる。異伝では漁師がこの島を見つけると、島では男が珊瑚を食べるために集めているのを見たとする。漁師がこの島に流され、帰りにパンの木を持ち帰った、とする話もある（Beckwith 1940: 67-8）。

別の神話では、鯨がコハラの岸に打ち上げられた。人々は解体を始めた。男がタロイモを持ってきて、鯨の頭にすがりつき切り始めると、頭が流れ出し彼はカヒキに連れてゆかれてしまった。そこで男は神殿の作り方や他の技術を習った。彼は穴から中身を取り出されて松ヤニで閉じられたココヤシの殻の中に入って戻ってきた。これがモオキニ・ヘイアウの建造の起源である（Beckwith 1940: 70）。

また豊饒の神ロノに関して、同様の島の伝承がある。ロノは農業の神であり、新年の祭りマカヒキはロノの来訪を祝うために行われる。この祭りの時人々は労働をやめ、フラダンスやボクシング競技などをして楽しむ。ロノ神には税として取り立てた物品が供物として捧げられる。

その起源の神話は次のようである。ロノは地上に二人の弟を使わして妻となるべき女性を捜させた。彼らはワイピオ谷で美しい女性を見つけた。それを聞いたロノは虹の橋を渡って地上に降りた。二人は結婚したが、地上の王が妻に横恋慕し、誘惑の歌を歌った。それを聞いたロノは怒りのあまり妻を殺してしまった。無実の妻を亡くして悲しんだロノは、妻の霊をなぐさめるために島中を回り、自分に刃向かうものとは力比べをしてうち負かした。誰もかなわなかったが妻は見つからずロノは悲しみ、カヌーを造って船出した。それは誰も見たこともない巨大な船だった。浜まで運ぶのに40もの人が必要だったが、ロノは一人で船出した。彼はカヌーではなく、ココヤシの木に覆われ家畜のたくさんいる島に乗って戻ってくることを誓った。だから人々は毎年ロノの到来を歓迎するのだ（Beckwith 1940: 37）。

##### 4.2. マオリのハワイキ

ニュージーランド・マオリはハワイキを祖先が航海してきた故郷だと語る。しかし彼らにとってハワイキはそれだけではない。第一に最初の間人が創造された場所だと言う。チキあるいは異伝ではタネがハワイキの土で人間をこねて造ったとされる。彼は自分と同じ形に粘土をこねて、それに息を吹き入れると生命が宿った。この過程は人間が子宮の中で繰り返すもので、人間の源境はハワイキだとされる由縁である。

第二に見るべきものに異常な出産の神話がある（後藤 2002: 107-109）。男がハワイキの島に流れ着いたところ、その島は強いタブーの神聖な島だった。住民は火を知らず、料理も知らず、正常な死

と生のサイクルを持っていなかった。彼は火のおこし方、料理の仕方を教え、一人の女を妻として正常な子供の作り方を教えた。こうして正常な生活、正常な生と死のサイクルを教えた。この話ではハワイキは生命の巨大な潜在力の土地として描かれている。ふつうこの種の話では、人は死を知らなかったとか、出産の時に死んでしまうとか、異常な生死をもつ状態として描かれている。

ハワイキはこのように生命の源であると同時に、食料の源としても描かれる。ハワイキはサツマイモが豊富に、人間の手をふれられずに繁茂していると語られる。また座礁したときしか利用できない鯨もハワイキから来たと言われるし、すべての魚はハワイキの近くの海から来ている。食用とされたネズミも、長い一列となって（互いに口で尾をくわえ）ハワイキから泳いできたとされ、またある種の鳥もハワイキから来たとされる。

このようにハワイキではよいことと悪いことの両方の起源があるとされる。これは儀礼の時、悪事をハワイキに送り出すのに都合がよい。体の出来物、くしゃみなども呪医によってハワイキに戻される。引き潮がハワイキに向かうのは死の兆候である。敵の死を祈る場合はハワイキに向かって潮が引くように、という意味の呪文を唱える。引き潮はこの世とハワイキの間にある障害物を運んでいってしまうと考えられる。

ハワイキは遠くにあり容易に到達できない場所にある。しかしハワイキの方角は一定ではない。まづ東は生命や実りがもたらされる方向である。健康や安寧を祈る儀礼では神官は東の方を向き、しばしば昇る太陽に手を伸ばして行く。またサツマイモを植えるときは太陽の方に向かって行った。

一方、死者は北ないし西に向かうとされた。これと同時にハワイキは太陽の沈む方向であると考えられていた。死者に向ける歌では、ハワイキの方に向かって船出し、沈む太陽に沿って行けと唱えられる (Orbell 1985: 13-16)。

## 5. 考察

ポリネシアでは、オセアニアでもっとも哲学的・抽象的な神話世界が広がる。同時に長距離航海民のポリネシア人の間では航海神話が発達する。海彼源境や魂の国への旅も海を越えるので、航海神話と「魂の旅」の話は重複し、厳密に区別できない。

始祖の国、生命や作物の源境、そして死後の世界などさまざまなイメージで語られる国がポリネシアのハワイキである。その方角を東ないし西に特定するのは生産的でないのかもしれない。たとえばマンガイア島のコスモロジーではこの世とあの世（ハワイキ）が対比されている。太陽は西に沈むとハワイキを通してまた東から上る。昇る太陽を見る場合、ハワイキは東であるし、沈む太陽を見る場合は西である。生命や実りがもたらされる方角は東であり、死者は一般的に西に赴く。西欧の方位観では東西は全く逆だが、ポリネシア人はここに連続を見ていたのではないか。

オーベルは、もともとハワイキは東にも西にもあったが、キリスト教化とともに東の重要性が失われ、死者の赴く場所として西方の観念が残存するに至ったと考えている。その観念はポリネシア人が基本的に西から来という事実とまた合致していたと論ずる (Orbell 1985: 18-19)。このような見解は、日本における仏教到来前後の海上他界観の変遷と対比するとき、きわめて興味深い問題が見えてくる。

ところで、インドネシアの航海術の議論でインドネシアの東と西を表す言葉は、西欧的な絶対方位ではなく、モンスーンの風の方角に対して決められるという (Ammarell 1999)。同じモンスーンは東西に吹く場所もあれば、南北に近い地域もある。彼らの東西方位は生活や航海という活動に沿って表現されていたのであり、むしろ固定的な方位は山側・海側の対比である。

オーストロネシア世界に多々見られる海彼源境の思想は、人々の生活とコスモロジーに密着したものである。彼らの概念に矛盾がある（例 死か生か、あるいは豊穡か汚れか）や、方位の混乱がある（東、南、あるいは西）と考えるのは、われわれのエスノセントリックな観点から来るのではないか。とくにオーストロネシア系民族の世界や宇宙観は、航海者としての生活感に根ざすところが大きいであろう。

引用文献

Ammarell, Gene

1999 *Bugis Navigation*. New Haven: Yale University Press.

Beckwith, Martha

1940 *Hawaiian Mythology*. Honolulu: University of Hawaii Press.

Böhne, H.H.

1937 *Der Ahnenkult in Mikronesien*. Leipzig.

Frazer, James

1994 *The Belief in Immortality and the Worship of the Dead*. Vol. I (New Guinea and Melanesia), Vol. II (Polynesia), and Vol. III (Micronesia). Richmond: Curzon Press.

Fox, C.E.

1924 *The Threshold of the Pacific*. London: Kegan Paul.

Gifford, Edward T.

1924 *Tongan Myths and Tales*. B.P. Bishop Museum, Bulletin 8.

Gill, William W.

1876 *Myths and Songs from the South Pacific*. London: King.

後藤 明

1996 『海の文化史』、未来社。

2002 『南島の神話』、中公文庫、中央公論新社。

2003 『海を渡ったモンゴロイド』、講談社選書メチエ、講談社。

Mackenzie, Donald A.

1930 *Myths from Melanesia and Indonesia*. London: The Gresham Publishing.

Moss, Rosalind

1925 *The Life after Death in Oceania and the Malay Archipelago*. Humphrey Milford: Oxford University Press.

Orbell, Margaret

1985 *Hawaiki: a New Approach to Maori Tradition*. Christchurch: The University of Canterbury.

シェーラー、H.

1979 『ガジュ・ギャクの神観念』、弘文堂。



Spiegel, H.

1971 Soul-boats in Melanesia: a study of diffusion. *Archaeology and Physical Anthropology in Oceania* 6: 32-43.

Steinen, Den, von

1988 *Von Den Steinen' s Marquesan Myths*. Canberra: Australian National University.

海彼世界への魂の旅ーオーストロネシア（南島）語族における死者の島の諸相  
図版

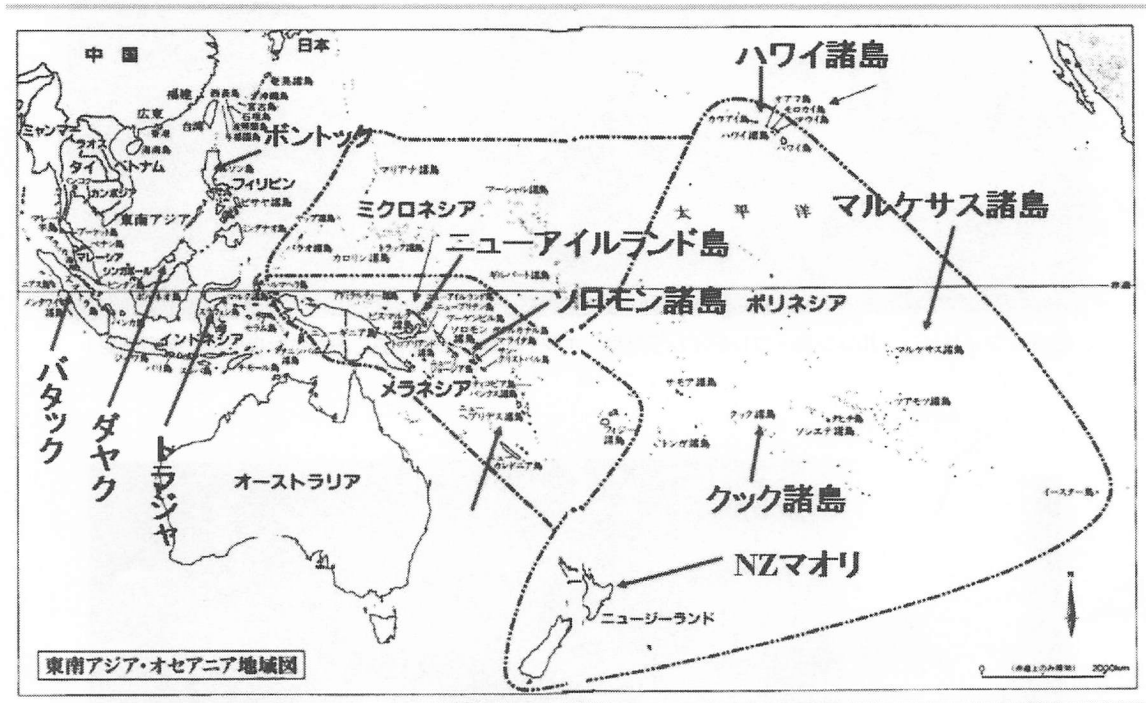


図1：オーストロネシア語世界と本稿で登場する主な地域

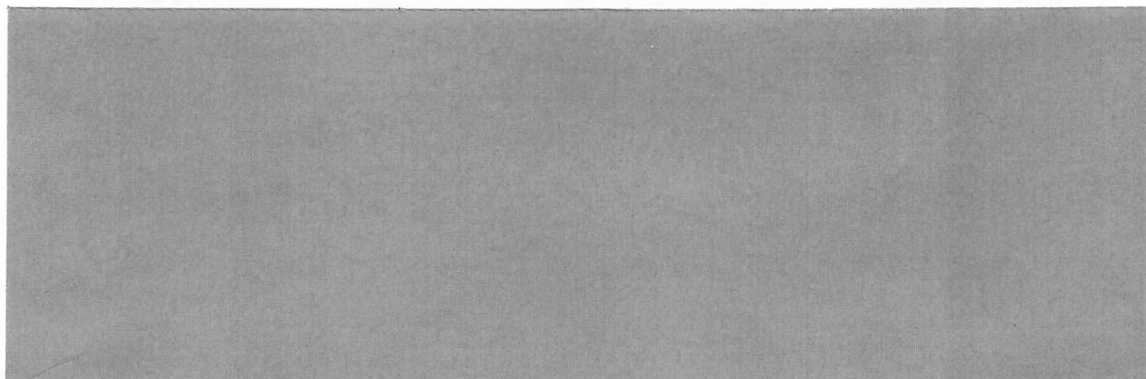


図2：ボルネオ島・ダヤク族の魂船（シェーラー 1979：図版8）



図3：フィリピン・ルソン島・コレディレラ高地・ポントック族の洞穴墓におかれた舟形棺（筆者撮影）

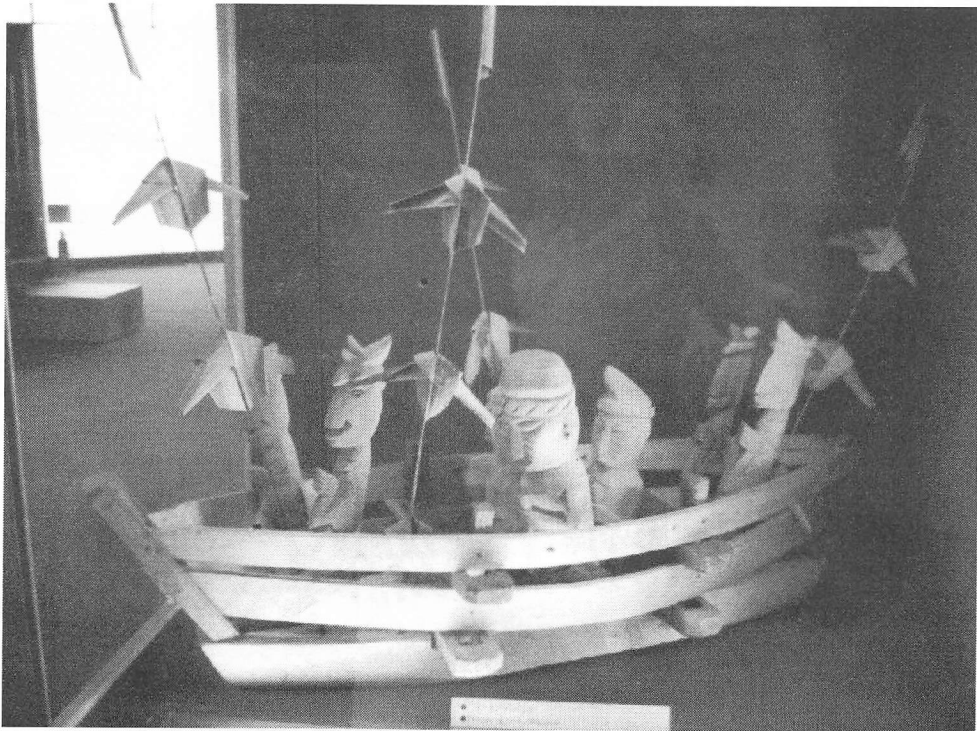


図4：マレー人の厄送り船（沖縄海洋博公園海洋文化館資料；筆者撮影）





図5：ソロモン諸島・マライタ島・ランガランガラグーンの死者の島タアルアブ  
(タアル=小島、サンゴ礁、アブ=タブー；筆者撮影)



図6：ハワイのオアフ島北西端のカエナ岬。魂の旅立つ場所とされる（筆者撮影）

